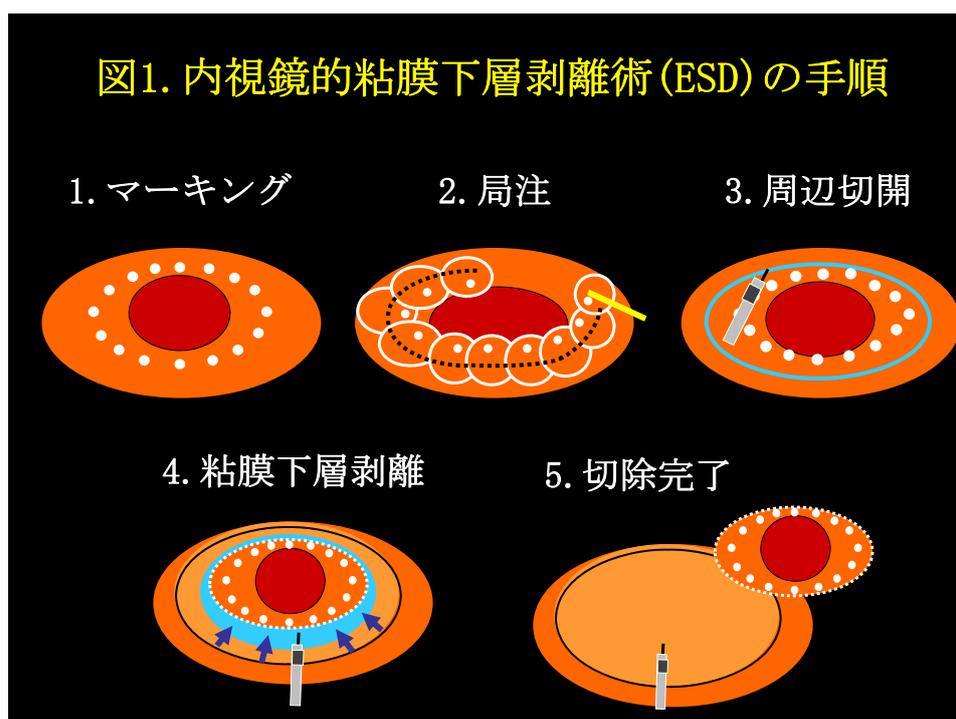


早期胃癌

日本人の死因で最も多いものは悪性腫瘍（癌）です。胃癌の死亡数は以前はすべての癌の中で最も多かったのですが、年々減少傾向で、現在では肺癌に次いで第2位となっています。しかし現在でも年間約5万人の人が胃癌で死亡しています。また、発症数は依然として第1位です。胃癌の治療において大切なのは早期発見、早期治療です。内視鏡機器の発達に伴い、以前は発見困難であった微小な胃癌が早期に見つかるようになってきました。当院では狭帯域光観察（NBI）、拡大内視鏡、蛍光内視鏡（AFI）を用いて早期胃癌の正確な範囲診断を行っています。また治療に関しては以前は2cm以下の腫瘍しか内視鏡での治療はできませんでしたが、サイズが大きくてもリンパ節転移の可能性がほとんどないと考えられる病変（適応拡大病変）に関しては、内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)により腹部にメスを入れることなく、内視鏡での治療が可能になりました(図1)。当院では2002年にESD導入後、年々症例数は増加し、現在は年間100例以上の治療を行っています。治療成績を以下(図2)に示します。

図1. 内視鏡的粘膜下層剥離術(ESD)の手順



(図2) 治療成績 (関連病院分も含む) 2009年12月まで

	適応内病変 (515 病変)	適応拡大病変 (411 症例)
一括切除率	502/515 97.5%	393/411 95.6%
一括治癒切除率	496/515 96.3%	373/411 90.8%

*適応外病変は除く